

大雪のあとは心臓病による入院が増加

世界的な気候変動により、激しい吹雪がさらに頻繁に起こることが予測されるが、その健康被害に関するエビデンスは少ない。本研究では、降雪の当日および6日後に発生した心臓血管病や転倒や外傷など寒さに関連する症状について検討した。

2010～2015年の11月から4月までの間に米国・ボストンの4か所の大病院に入院した成人433,037人の情報を収集した。降雪量は、少量（およそ0.1-12 cm）、中等量（およそ12-25 cm）、大量（25 cm超）に分けて分析した。その結果、心臓血管病による入院は、大量降雪の当日には32%減少（相対リスク0.68）するが、2日間では23%増加した（相対リスク1.23）。寒さに関連する入院は、大量降雪の当日には3.7%増加し（相対リスク3.7）、その後5日間も高い数値を維持していた。転倒については、中等量の降雪後6日間、平均18%増加した。

したがって、大量降雪の当日には心臓血管病による入院件数は減少するものの、2日間で入院が急増することが示された。今回の知見は、過酷な寒さに見舞われる地域での入院や健康への対策の一助となるであろう。

出典：American Journal of Epidemiology. Published online Jan 30, 2017;

doi: 10.1093/aje/kww219